

## 1 はじめに

新人さん、いらっしゃーい！

中熊秀喜

着任以来、毎年作成してきた年報は今回で6冊目。各年報を数字で眺めると、9、16、10、8、5は選択実習で血液内科に来た参加学生数、そして8、4、1、8、16は血液内科を卒後研修に選んだ年度毎の研修医数の推移。現在研修2年目の医師は彼らが医学部4年生の系統講義時から成長を見守って来た我々の言う事実上の教え子1期生である。医局で学生を見かける機会が少し増え、これまでの教育面での教室員の努力が少し報われた可能性があり素直に喜んでいる。他に新入局の声も聞こえてきてやはり少しの手応えを感じる。彼ら若い医学徒を大歓迎するとともに成長を楽しみにしている。和歌山県では人口比で血液専門医は極めて不足しており、全国的には騒がれている産婦人科や小児科よりも県内に限れば血液内科診療の社会的ニーズや将来性は極めて高いと判断している。これから参加してくる若い医師が腫瘍内科や血液内科や一般内科における優れた臨床医として地域医療や医学界で大活躍する将来の姿がとても楽しみになってきた。

診療ガイドラインを最低限の参考基準ととらえ、血液診療領域が重ならない優秀な血液専門医を県外から招き、質の高い安全な医療の提供を心がけてきた。徐々に県内はもちろん県外からも相談が増えており気を引き締めている。一方、着任以来、研究面では国内外への積極的発信を堅持し、インパクトファクター5以上の英文原著は11論文(うち4論文は同ファクター10)、英文総説は2、臨床の小さい教室ながら堅実に歩んで来たと考えており、同僚の努力にただただ感謝する。花岡伸佳助教が4月からシアトルへ留学し、来る2月から小島講師がテキサスへ渡米する。それぞれに無事かつ期する目標の達成を願っている。

ところで、古いキャンパスからの負の遺産である放射線使用や管理の問題で多くの方々にご心配とご迷惑をかけたことを心からお詫びする。最後に、私に残された大学生活は9年ほど。あとを振り返るには早いですが時間的余裕はなく、過去を知り反省しつつ前を見つめて歩むしかない。従来から受けて来た多方面からのご支援に感謝するとともに、今後ともご厚情を賜りたい。忙しい診療を支えてくれている緩和ケア月山准教授、また外来、輸血部、5西病棟の方々、医局秘書の大橋さんと東さん、等に深謝。

## 2 教室現況

### (1) 教室員

医局	教授	中熊秀喜
	准教授	園木孝志 (集学的治療・緩和ケア部)
	講師	松岡 広 (集学的治療・緩和ケア部)
	講師	小島研介
	助教	采田志麻 (集学的治療・緩和ケア部 ～3月31日)
	助教	花岡伸佳
	学内助教	栗本美和 (大学院生)
	学内助教	島貫栄弥 (大学院生)
	学内助教	飯田武 (集学的治療・緩和ケア部 4月～9月)
	学内助教	勝田将裕 (集学的治療・緩和ケア部 4月～9月)
	学内助教	伊奈志乃美 (集学的治療・緩和ケア部 10月1日～)
	学内助教	廣野誠子 (集学的治療・緩和ケア部 10月1日～)
	研究生	なし
	大学院生	綿貫樹里
	出向	なし
	留学	花岡伸佳 (4月1日～) 米国ワシントン州シアトル市 <b>Fred Hutchison Cancer Research Center</b>
	研修医	前田智信 (1月1日) 中野美香 (3月1日～3月31日) 奴田絢也 (3月1日～4月30日) 岩谷由佳 (4月1日～5月31日) 中井康雄 (4月1日～6月30日) 吉田 円 (4月1日～6月30日) 井坂華奈子 (5月1日～6月30日) 黒崎弘倫 (7月1日～8月31日) 中島隆弘 (7月1日～8月31日) 益満 茜 (7月1日～12月31日) 松田悠里 (7月1日～8月31日) 高 真守 (8月1日～9月30日) 垣本信幸 (10月1日～11月30日)

	森 めぐみ (10月1日～12月31日)
	加藤智也 (11月1日～12月31日)
	山田大介 (12月1日～12月31日)
留学生	なし
秘書	大橋典子、東 恵美
輸血部 主査	松浪美佐子
副主査	堀端容子 (4月1日～)
副主査	中島志保
医療技師	東 み幸 (～3月31日)
医療技師	滝本真由美
医療技師	楠山摩希子

(2) 役割・責任体制 (血液内科医局 7月～12月)

園木：病棟医長 (入退院, 当直表・日誌)、副科長、教育主任 (4年生臨床医学講座「オーガナイザー」、学生臨床実習など)、保険請求担当医 (入院)、がん診療拠点病院担当医、電子カルテプロジェクトメンバー、身体障害者福祉専門分科会審査部会委員、和歌山県エイズ対策推進協議会委員、原爆被爆健康管理手当等認定医、更正医療担当

松岡：医局長 (医局行事, 研究会, カルテ, 治験)、研究主任、がん化学療法プロトコール委員会、薬事委員、試薬管理責任者、和歌山県骨髄移植対策協議会委員、移植調整医師、人権・同和研修委員、感染予防対策委員、オーダリングシステム

小島：外来医長、リスクマネージャー、救急・集中治療連絡委員、卒後研修委員、栄養管理委員、レセプト、DPC、輸血委員会、保険請求担当医 (外来)、がん診療拠点病院担当医、和歌山県献血推進協議会

秘書：慶弔・渉外、薬の説明会

(3) 人事異動

助教	退職	采田志麻	(3月31日)
5 西病棟師長	転出	岡本恭子	(3月31日)
5 西病棟師長	転入	小谷典子	(4月1日)
外来副看護師長	退職	高井茂代	(3月31日)
外来副主査	退職	齋藤涼子	(3月31日)
医療技師	転出	東 み幸	(3月31日)
輸血部副主査	転入	堀端容子	(4月1日)

# 臨床実習

平成 20 年 4 月～

輸血・血液疾患治療部（血液内科）								
集合場所：入院病棟 5 階西 集学カンファレンスルーム（内線 2539）								
日付	8	9	10:30	12:30	13:30	15	16	17～
/ 月		実習の 楽しみ方 (中熊教授)	症例学習			症例学習 【テーマ決定】(主治医)		17:00- 19:30 チャート カンファレンス
/ 火	8:30-10:00 入院患者廻診 (中熊教授 /園木准教授)	10:00-12:30 血球形態を 学ぶ (中熊教授)		症例学習		15:00- 輸血部実習 (松浪主査)	16:00- 血液がんの 化学療法とは (小島講師)	
/ 水		外来・内科診察 (中熊教授)				症例学習		18:00- 抄読会
木	カンファ レンス (CC/ MGH)	症例学習				15:00- 造血幹細胞 移植を知る (松岡講師)	16:00- HIV 感染症を 把える (園木准教授)	
/ 金		症例学習			症例学習		16:00- レポート発表会/ レポート提出 (園木→松岡→小島) ※レポートは全員分と 教官用を準備	

自ら考え、自ら行動しましょう。

## 4 主な活動内容

### (1) 学術講演会

#### 1) 国内講演会

小島研介：「最近増えてきた骨髄異形成症候群」、第 397 回和歌山市医師会内部会例会、3 月 6 日、和歌山市

園木孝志：「ヒト造血器腫瘍と microRNA」、第 145 回日本獣医学会学術集会、3 月 30 日、相模原市

中熊秀喜：「グループケーススタディ、汎血球減少へのアプローチ」、第 1 回研修医（前期、後期）のための血液学セミナー、日本血液学会共催、7 月 12 日、神奈川

園木孝志：「HIV感染症の現状」、第404回和歌山市医師会内部会例会、8月28日、和歌山市

小島研介：「p53を標的にした白血病治療」、第 4 回高知あすなろの会、9月13日、高知市

園木孝志：「和歌山県におけるHIV感染症の現状」、日本医師会生涯教育講座、10月18日、有田市

中熊秀喜：「たかが貧血、されど貧血」、鹿児島血液セミナー、11月21日、鹿児島市

園木孝志：「和歌山県におけるHIV感染症の現状について」、和臨技世界エイズデーイベント、11月29日、和歌山市

中熊秀喜、大屋敷一馬、小松則夫、七島 勉：「骨髄不全疾患としての発作性夜間血色素尿症（PNH）」、第 2 回若手臨床血液学セミナー、日本血液学会監修、11 月 30 日、東京

## 2) 海外または国際講演会

該当なし

### (2) 学会および研究会

#### 1) 国内学会

園木孝志、采田志麻、栗本美和、花岡伸佳、中熊秀喜：「複雑な C-MYC 転座を示す CD5 陽性大細胞型 B リンパ腫細胞株の樹立」、第 89 回近畿血液学地方会、6 月 21 日、大阪

中井康雄、岩谷由佳、島貫栄弥、栗本美和、小島研介、中熊秀喜：「後天性血液凝固第 V 因子インヒビターの 1 例」、第 186 回日本内科学会近畿地方会、10 月 6 日、京都

中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン(血色素)尿症の魅力」、教育講演、第 70 回日本血液学会総会、10 月 10 日～12 日、京都

中熊秀喜、花岡伸佳、川口辰哉、島貫栄弥、小島研介、米村雄士、堀川健太郎：「PNH や再生不良性貧血では NKG2D 介在性免疫による造血障害が発生する」、第 70 回日本血液学会総会、10 月 11 日、京都

園木孝志、采田志麻、後藤美奈子、栗本美和、花岡伸佳、松岡 広、谷脇雅史、中熊秀喜：「複雑な C-MYC 転座を示す CD5 陽性大細胞型 B リンパ腫細胞株の樹立」、第 70 回日本血液学会総会、10 月 10 日～12 日、京都

小島研介、Marina Konopleva、Michael Andreeff、島貫栄弥、栗本美和、小塚輝彦、中熊秀喜：「急性骨髄性白血病における Aurora 阻害後アポトーシスに与える p53 の影響」、第 70 回日本血液学会総会、10 月 10 日～12 日、京都

栗本美和、松岡 広、采田志麻、花岡伸佳、中熊秀喜：「M-CSF やデシタビンは U937 細胞に対する ゲムツズマブ・オゾガマイシンの殺細胞効果を増強する」、第 70 回日本血液学会総会、10 月 10 日～12 日、京都

島貫栄弥、爾見雅人、前田嘉信、花岡伸佳、中熊秀喜、小島研介：「P13k/mTOR 阻害剤 P1-103 による、AML 細胞における p53 依存性アポトーシスの増強効果」、第 70 回日本血液学会総会、10 月 10 日～12 日、京都

古賀 震、島貫栄弥、小島研介、中熊秀喜：「後天性血液凝固第 V 因子インヒビターの 1 例」、第 31 回日本血栓止血学会学術集会、11 月 21 日、大阪

## 2) 海外または国際学会

Kensuke Kojima, Marina Konopleva, Hideki Nakakuma, Michael Andreeff: Concomitant inhibition of Mdm2-p53 interaction and aurora kinases activates p53-dependent postmitotic checkpoints and synergistically induces p53-mediated mitochondrial apoptosis and reduced endoreduplication in AML. 第 99 回米国癌学会, 4 月 12-16 日, San Diego, CA

Michael Andreeff, Weiguo Zhang, Marina Konopleva and Kensuke Kojima: Synergistic induction of apoptosis in acute myelogenous leukemia (AML) by concomitant MAP and Aurora kinase and MDM2 inhibition. 14th international p53 workshop, 10 月 27-31 日, Shanghai, China

Marina Konopleva, Tzee Tsao, Julie Watt, William Bornmann, Kensuke Kojima, Michael Andreeff: Mechanisms of synergistic apoptosis induction via concomitant blockade of HDM2 and Bcl-2 protein function in leukemias. 14th international p53 workshop, 10 月 27-31 日, Shanghai, China

Kanakura Y, Ohyashiki K, Shichishima T, Okamoto S, Ando K, Ninomiya H, Kawaguchi T, Nakao S, Nakakuma H, Nishimura J, Kinoshita T, Bedrosian, C, Valentine ME, Ozawa K, Omine M. Safety and efficacy of the terminal complement inhibitor eculizumab in Japanese patients with paroxysmal nocturnal hemoglobinuria: AEGIS phase II clinical study results. 第 50 回米国血液学会総会 (ASH), 12 月 6-9 日, San Francisco, CA



Marina Konopleva, Twee Tsao, Xiaoyang Ling, Kensuke Kojima, Julie Watt, Duncan H. Mak, Monique Verhaegen, William Bornmann, Maria Soengas and Michael Andreeff: Activation of p53 signaling is synergistically enhanced by Bcl-2 inhibition through induction of Noxa and Bak/Bax heterodimers resulting in apoptosis of AML stem cells. 第50回米国血液学会, 12月6-9日, San Francisco, CA

### 3) 研究会

細井裕樹、園木孝志、島貫栄弥、栗本美和、花岡伸佳、采田志麻、小島研介、松岡広、中熊秀喜:「臍帯血移植を行った最重症型再生不良性貧血の一例」、第6回和歌山造血細胞療法研究会、2月9日、和歌山市

蒸野寿紀、園木孝志、花岡伸佳、采田志麻、松岡広、中熊秀喜:「伝染性単核球症様症候群を呈したHIV感染症の2例」、第5回和歌山研修医セミナー、2月16日、和歌山市

中熊秀喜:「NKG2D介在性免疫による造血障害と変異クローンのエスケープ」、第3回血液腫瘍免疫療法フォーラム、4月5日、松山市

采田志麻、村田祥吾、園木孝志、中村靖司、松岡広、直川匡晴、中熊秀喜:「ドキシル(リポゾーム包埋化ドキシソルビシン)を使用したエイズ関連カポジ肉腫の一例」、第36回和歌山悪性腫瘍研究会、12月7日、和歌山市

### (3) 学術論文

#### 1) 和文原著

該当なし

#### 2) 英文原著

Parker C, Omine M, Richards S, Nakakuma H, et al (for PNH Interest Group). Diagnosis and management of paroxysmal nocturnal hemoglobinuria. Blood 106:3699-3709, 2005 (2005年版の年報から漏れていたのここ掲載)

Uneda S, Sonoki T, Nakamura Y, Matsuoka H and Nakakuma H: Rapid vanishing of tumors by withdrawal of methotrexate in Epstein-Barr virus-related B cell lymphoproliferative disorder. Intern Med 47: 1445-1446, 2008

Sonoki T, Ishihara S, Uneda S, Hanaoka N, Kurimoto M, Matsuoka H and Nakakuma H: Aggressive CD5-positive B-cell lymphoma after remission of CD5-negative follicular lymphoma with distinct immunoglobulin heavy chain rearrangement and translocation. Int J Hematol 88: 299-303, 2008

Uneda S, Gotoh M, Sonoki T, Nishida K, Nakamura Y, Kurimoto M, Hanaoka N, Matsuoka H, Taniwaki M and Nakakuma H: Establishment of CD5 and CD10 double-positive mature B-cell line, WILL1, showing complex 8q24 translocation involving 14q32 and 6q27. Int J Hematol 88: 536-542, 2008

Kojima K, Shimanuki M, Shikami M, Samudio IJ, Ruvolo V, Corn P, Hanaoka N, Konopleva M, Andreeff M, Nakakuma H :The dual PI3 kinase/mTOR inhibitor PI-103 prevents p53 induction by Mdm2 inhibition but enhances p53-mediated mitochondrial apoptosis in p53 wild-type AML. Leukemia 22:1728-1736, 2008

Kojima K, Konopleva M, Tsao T, Nakakuma H, Andreeff M: Concomitant inhibition of Mdm2-p53 interaction and Aurora kinases activates the p53-dependent postmitotic checkpoints and synergistically induces p53-mediated mitochondrial apoptosis along with reduced endoreduplication in acute myelogenous leukemia. Blood 112:2886-2895, 2008

### 3) 和文総説

中熊秀喜、花岡伸佳:発作性夜間ヘモグロビン尿症。内科 101(6):1594-1598, 2008

川口辰哉、中熊秀喜:発作性夜間血色素尿症の病態研究と治療の進歩。血液・腫瘍科 56(2):189-197, 2008

中熊秀喜：発作性夜間ヘモグロビン(血色素)尿症の魅力。臨床血液 49:46-56, 2008

中熊秀喜：よくみる貧血と話題の貧血。和歌山県内科医会会誌 22:14-21, 2008

松岡広、中熊秀喜：特発性自己免疫性溶血性貧血に対する免疫抑制療法。血液フロンティア 18(7):95-98, 2008

#### 4) 英文総説

該当なし

#### (4) 著書(単行本、シリーズもの含む)

中熊秀喜、花岡伸佳：ヘモグロビン異常症。小澤敬也、直江知樹、坂田洋一、編集、「講義録 血液・造血器疾患学」、メジカルビュー社、pp158-160, 2008

中熊秀喜、花岡伸佳：ポルフィリン症。小澤敬也、直江知樹、坂田洋一、編集、「講義録 血液・造血器疾患学」、メジカルビュー社、pp161-162, 2008

園木孝志：悪性リンパ腫。園木孝志、吉増達也編集、「がん化学療法看護 08-09」、日総研出版、pp 108-126, 2008

Takashi Sonoki and Norio Asou : Insertion of *miRNA125b-1* into immunoglobulin heavy chain gene locus mediated by *V(D)J* recombination in precursor B cell acute lymphoblastic leukemia. 「MicroRNAs FROM BASIC SCIENCE TO DISEASE BIOLOGY」 Edited by Krishnarao Appasani, Cambridge University press, pp372-379, 2008

#### (5) その他の印刷物（研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など）

西村純一、金倉 譲、木下タロウ、七島 勉、中熊秀喜、中尾真二、川口辰哉、井上徳光、村上良子、杉森千春、堀川健太郎、池田和彦、長倉祥一、野地秀義、上田康敬、石原園子、清木ゆう、小澤敬也、小峰光博、翻訳。「ロス先生のPNHってどんな病気？、第2版日本語版、患者さんのためのガイド」、Duke 大学とUtah 大学のPNH 外来チーム編集

#### (6) 受賞等

園木孝志：第36回和歌山悪性腫瘍研究会奨励研究賞

#### (7) 研究費、助成金

中熊秀喜：平成20年度厚生労働科学研究費補助金 特発性造血障害に関する調査研究班 溶血性貧血領域研究協力（班長 小澤敬也 自治医大教授）

園木孝志：和歌山県立医科大学 平成20年度特定研究助成プロジェクト、「染色体転座点から単離したmicro RNAがはたす発ガン機序の解明」

園木孝志：財団法人大阪癌研究会 平成20年度一般学術研究助成「染色体転座点から単離したmicro RNAがはたす発ガン機序の解明」

小島研介：財団法人ノバルティス科学振興財団研究奨励金、「急性骨髄性白血病に対する、DNA損傷によらないp53活性化を含む複数のシグナル経路を標的とした新規分子標的治療法の開発」

小島研介：公益信託日本白血病研究基金一般研究賞、「G2/M期タンパク制御による、急性骨髄性白血病細胞（AML）におけるp53依存性アポトーシスの増強」

小島研介：財団法人安田記念医学財団海外研究助成、「難治性白血病に対する、DNA損傷によらないp53活性化による新規分子標的治療の開発」

## (8) 支援研究会など

第6回和歌山造血細胞療法研究会、特別講演「HLA2-3 抗原不適合移植」小川啓  
恭、兵庫医大血液内科教授、2月9日、和歌山市

第4回 Practical Hematology、特別講演「骨髄不全の捉え方とマネジメント」、  
中尾真二、金沢大学医学部血液・呼吸器内科教授、2月23日、大阪市

第3回和歌山血液フォーラム、特別講演「急性白血病の治療、JALSG の臨床研究」  
麻生範雄、熊本大学血液内科准教授、10月18日、和歌山市

和歌山 Hematology Seminar , 特別講演1 「ポスト・イマチニブ時代における CML  
治療の新戦略」川口辰哉、熊本大学医学部附属病院感染免疫診療部准教授；2  
「鉄過剰症の現状と新しい治療戦略」高後 裕、旭川医大消化器・血液腫瘍制  
御内科学分野教授、11月15日、和歌山市

和歌山県立医大大学院特別講義「二つのロイコトリエンB4受容体の生理作用」、  
横溝岳彦、九州大学医学研究院医化学分野教授、12月19日、和歌山市

## (9) 海外出張

小島研介：第99回米国癌学会、4月12-16日、San Diego, CA

中熊秀喜：共同研究の打ち合わせ (Dr. Thomas Spies, Fred Hutchinson Cancer  
Research Center、12月4日, Seattle, WA

中熊秀喜：I-PIG 国際ミーティング、12月5日、San Francisco, CA

中熊秀喜：第50回米国血液学会総会 (ASH)、12月6-9日、San Francisco, CA

小島研介：第50回米国血液学会総会 (ASH)、12月6-9日、San Francisco, CA

## 5 診療実績

(1) 入院 患者総 (のべ) 数 (一時退院後を含む)	240 名
退院 患者総 (のべ) 数 (一時退院を含む)	243 名
(2) 外来	
患者総 (のべ) 数	4,444 名
内新患者数	205 名

入院患者疾病別分類 (入院のみ, 重複あり, 疑い症例を含む)

1) 白血病	106
急性骨髄性 (単球性等)	
M0	1
M1	2
M2	26
M3	12
M4	8
M4e0	4
M5	5
M5a	3
Mixes	0
MDS→AML	8
分類不可	3
急性リンパ性 (ALL)	24
慢性リンパ性 (CLL)	3
慢性骨髄性白血病 (CML)	7
2) 骨髄異形成症候群 (MDS)	9
3) リンパ性腫瘍	
非ホジキンリンパ腫	70
ホジキンリンパ腫	16
その他	
成人 T 細胞白血病 / リンパ腫	2

4) 形質細胞腫瘍	
多発性骨髄腫	13
5) 血球減少症 (造血不全含む)	
再生不良性貧血	7
汎血球減少症	4
血小板減少症 (ITP 等)	10
血球貪食症候群	0
その他の貧血 (鉄欠乏性など)	1
6) 溶血疾患	
自己免疫性	3
他の溶血性貧血	0
7) 凝固・線溶異常	1
8) 骨髄増殖性疾患	1
9) 感染症	
HIV 感染症 (エイズなど)	12
10) その他	
造血幹細胞移植ドナー入院	1
全身性エリテマトーデス	0
アミロイドシス	1
頭蓋底腫瘍	1
(4) 死亡	18
(5) 剖検 (率)	3 (16.7%)

## 6 リーダーレポート

集学的治療・緩和ケア部 准教授 園木 孝志

今年の2月に采田志麻先生が熊本へ、4月には花岡伸佳先生がシアトルへと活躍の場を移された。これまでの両先生方の臨床・研究・教育への努力にあらためて感謝します。この4月から病棟医長を拝命したが、血液内科のスタッフはもちろんのこと、小谷師長をはじめ5西のスタッフには陰に陽に助けていただいた。有難うございました。集学的治療部に消化器外科の先生が採用され、特にリンパ腫の診療にご尽力していただいた。外科医にとってなれない職場になれない患者相手に大変だったことだろうと思う。ご苦労様でした。主治医や当直の割り当てには、ひとりひとりの荷重があまり変わらないように工夫したつもりだが、一過性に荷重が重くなったスタッフもいらっしやと思う。ご容赦いただきたい。外来では、化学療法センターの充実とともに外来化学療法を受ける患者さんが急増しており、免疫障害の方も増加している。このような外来患者増加に対して、他科医師・薬剤師・看護師・地域医療連携室の方々に助けていただいております。チーム医療が充実してきたと感じることが多々あった。

研究面では、他施設との共同研究をすすめている。お互いハッピーな結果になってほしいと思っている。また、ようやく和歌山産かつ和歌山発の論文を書くことができ、和歌山県立医科大学から特定研究助成を受けることができた。さらに本学に恩返しをしたい。また、大阪癌研究会からも助成をうけることができ、数年間かかった土俵作りを終え、ようやく自分で「相撲」がとれる状況になったなど感じている。長年の夢だったトランスジェニックマウスを現在作成中で、私が見つけたゲノム異常がどのような表現形質を示すのか、楽しみにしている。

教育面では、今年も多数の若い先生方が研修に来てくれたことを心から喜んでいる。血液内科も内科の一部であると考え、他科の診療に応用がきくような知識や技術を身につけてもらいたいと思っている。医学部学生が実習に来たときには、研修医が中心となってNEJM誌に掲載されているMGH例を検討し、論理的な内科診断学を身につけていただこうと図っている。血液内科に限らず、日々の診療をカルテに記録し患者さんから学ぶという姿勢を持つ後輩を育てたい。



熱き思いは通じるか。

医局長・講師 松岡 広

和歌山へ来て3年余りが経過した。昨年4月には医局長を拝命した。まだ歴史の浅い医局で苦労は多い。しかし、心通じる仲間と共に、仕事を通じて社会と医学へ貢献していく手ごたえを感じる。

まず、昨年は実に16名もの研修医諸君が当科で研修を受けた。以前は1年に1名か2名であったので、劇的な進歩である。これまで、学生・研修医教育にかけてきた熱意と時間は決して無駄ではなかった、と胸の奥から熱いものが込み上げてくる。一昨年や二年前に当科へ来てくれた研修医の先生方の口コミ効果もあるのではと考えている。「あそこへ行けば、勉強になるよ」と。更に、先日、蒸野寿紀先生、村田祥吾先生、細井裕樹先生の3名の先生方が当科で後期研修をする決断をしてくれた。いわゆる入局である。彼らは一昨年、同時期に当科を研修した同期生である。本学出身ないしは本学で研修した先生方の入局は、栗本美和先生以来、実に7年ぶりとなる快挙である。更に当科スタッフであった和歌山労災病院、阪口臨先生の指導を受け血液内科に興味を持った先生が1名、参加することが期待されている。これまで、出口の見えないトンネルの中にいるような、そんな暗い思いに沈んだことがあった。若い人が入って来なければどのような組織も経年変化で崩壊する。当科はいわば離陸してすぐの不安定な時期に、失速・墜落の危険にあったといえる。

和歌山の血液内科診療・研究をより盛んにするためには若い医師の新規加入が必須である。当県の血液内科教育の歴史はまだ浅い。そのため、血液専門医、または軽症血液疾患患者を苦しめず引き受けてくれる一般内科医が長年にわたり極度に不足している。したがって血液患者は軽症・重症を問わず、本学とお隣の日赤和歌山医療センターへ集中し、臨床は多忙を極める。そのような中、教育と研究に時間を割くのは大変な苦労であった。

しかし、前述のようにその苦労は実りつつあるのかもしれない。本年1月より、当科ならびに大阪市大をはじめとする近隣7施設が参加する臨床試験「再発・難治性急性骨髄性白血病患者に対する抗がん剤およびG-CSF(顆粒球コロニー刺激因子)先行ゲムツズマブオゾガマイシン療法の効果解析」を主宰している。少しずつだが登録症例も増えてきて、参加施設の先生方のご協力に心から感謝している。論文発表も少し増えてきた。私が直接指導している大学院生の栗本先生は多忙な臨床の合間に時間を見つけ、大変熱心に研究を行っている。研究

開始後 1 年弱であるが、データが出てきており、論文発表も近いのではと期待している。

これまで 2 年弱、当科の臨床と教育・研究を引っ張ってくれた小島研介先生が米国へ栄転された。これまでのご尽力に感謝するとともに彼の地での益々の発展を祈っている。

追記。

一昨年 4 月、同期生の中で先陣を切って当科研修を選んでくれた吉村卓朗先生は、その後、多くの研修医諸君が当科での研修を選んでくれるきっかけとなった。彼は、私たちとしては残念なことに、故郷の大学へ戻ることとなった。しかし、彼も血液内科を専攻することを選んでくれた。私たちの意気が通じたものと目頭が熱くなった。人生、人と人の交わりはどうつながっていくか分からない。今後も人の和を大切に、吉村君のような我々の応援団を増やしていきたいと考えている。

今年も頑張ろう。

## 「2009年所感」

輸血・血液疾患治療部 講師 小島 研介

日本が海外メディアにとりあげられたのは、総理大臣が2年連続で政権を途中で放り出したことと、金融危機がトヨタ自動車の経営にも暗い影をおとしたことくらいでしょうか。われわれの分野に目を移してみても、医療環境の荒廃、医学研究のレベル低下が明らかになってきました。「Japan passing から Japan nothing」の言葉に代表されるように、日本に対する世界の興味は失われているのかもしれませんが。そんな中で、日本の地方都市にひきこもって (shrinkage) いるのでは、やがて細胞死 (apoptosis) におちいります。ここはひとつ甲羅から首をだして、いろいろな国・人種の一流の人たちと交流することが、将来のひと・組織の発展の礎になるのだと思います。

研究は他の専門家からの科学的批判に耐えられるものでなければ、自己満足になります。昨年の成果がいくつかは実り、今年は論文が BLOOD と LEUKEMIA に1本ずつ、学会発表も AACR に Late-Breaking abstract として1つ、日本血液学会総会では口演として2つ、ASH はポスターでしたが1つ報告できました。日本血液学会の口演の1つは島貫先生が発表しましたが、総会の緊張した雰囲気の中、立派に発表をこなしました。助成金は、ノバルティス財団、白血病研究基金、安田記念医学財団より受賞することができました。第三者に客観的に評価いただき、審査のうえで私の研究遂行のために善意のお金を賜れたことは、大きな励みになります。真夜中や週末に、ひとり研究を続けてゆくのはしんどいな、と感じた1年でもありました。

臨床は、よい医療チームにまとまってきたと実感できた年でした。看護師さん、臨床検査、輸血部、放射線技師さん、事務員さん、そして秘書さんの方々が、私など業務・時間外にも無理なお願いをしてくるにもかかわらず、積極的に自発的に協力してくれたのが印象的です。派手な言葉はなくても、地道な努力はきっと社会に認められてゆくと思います。研修医もみなすぐれた人材でした。特に印象に残っていることをあげますと、中井先生が内科学会近畿地方会で堂々とした発表をしてくれたことと、益満先生と森先生の2人が、当初の研修予定を自発的に延長してくれたことです。いずれも指導者冥利に尽きます。彼らが研鑽をつづけてゆき、大きな人間的な器を兼ね備えた、素晴らしい医師に

なるものと信じています。

米国MDアンダーソンがんセンターから、幹細胞移植・細胞治療科、分子血液治療部客員准教授として招聘され、平成21年2月より勤務します。留学のときに前臨床試験レベルで終わってしまった、白血病に対するあらたな分子標的治療の臨床試験に携わってきます。円高の影響もあり給与は今より下がりますし、いまだにあこがれを追いかけていていいのかなという思いはありますが、世界有数のがん医療センターで、日本人のいない（逃げ場がない）環境で、世界的に高名な先生や一流の研究者に囲まれて過ごすのは、おおきなストレスと、もっとおおきな人生経験を与えてくれるのではと、わくわくします。

最後に若い方々に。

澹泊に非ざれば、以って志を明らかにするなく、寧静に非ざれば、以って遠きを致すなし（お金や地位に無欲でなかったら、志を持ち続けることはできない。じっくりと自分を磨かなかつたら 大きな仕事を成し遂げることはできない）。諸葛亮孔明の遺言です。雄弁に語らなくても、自己がやるべきこと、できることをきちんとやっているひとのことを、みている人もいます。成長したみなさんとまたお会いできることを楽しみにしています。

## 7 主な来訪者（セミナー講師など）

横溝岳彦 九州大学医学研究院・医科学分野教授  
（大学院生対象特別講義、12月19日）

## 8 寄稿文

親愛なる“お仲間”の皆様へ

独立行政法人労働者健康福祉機構

和歌山ろうさい病院 血液内科 阪口 臨

当科は、貴科における、初めての公的関連病院として、平成18年1月に新設いただき、診療開始して、はや3年が経とうとしています。

思い起こしますと、当時の貴科の入院診療状況は、5階西集学以外に、8階東にも専用病床があり、さらにそれでも不足しており、他の病棟を間借りしていました。ただし、間借りにも期限があり、その病床のやりくりだけでも、各担当部署の皆様には、大変な手間や労苦がかかっていたものと記憶しています。そこで、中熊先生は貴科へご着任後、この状況の打開策として、公的関連施設の必要性を痛感され、院外での血液内科の開設に向けてご尽力されました。当病院は、当時、新病院への移転計画が進行中であり、診療科の新設に積極的（当科開設の半年前に循環器科など）であったため、双方の思惑が合致した次第でした。

私は、当病院全体のポリシーとも一致しますが、電話などでご連絡が入ったときは、先方は相当お困り、と察しまして、出来る範囲でご期待にお応えしていきたいと思っています。特に、昨今の医療崩壊現象のあおりを受ける形で、阪南・泉南地区からの“難民”患者さん方の受け皿的役割も、当病院は担ってきています。当科では年末も、この年始に病院移転を控える状況の下で、他施設からの転院希望患者さんを全てお引き受けしています。

ただ、このような対応ができるのも、当科スタッフの充実（小林 慎先生の加入、がん化学療法看護認定看護師の常駐など）が図られたからです。

平成21年1月13日開院予定の新病院において、救急重視の方針により、全体の病床数が減少するにも関わらず、有難いことに、当血液内科のみ、増床となります。これも、中熊先生をはじめとした皆様のお力添えの賜物であり、また、この3年間における当科の実績が認められたからです。

血液疾患患者に関わる全ての関係部署のスタッフの仕事がどれほど大変なものか、同じ現場にいた者として、少しばかり理解できているつもりです。また、当方が関連病院として活動しても、貴科の患者数が減ったわけではなく、患者さんの実数が増えている現状があると、肌で感じています。そこで当科の使命

として、患者さんの受け入れ態勢を更に強化することで、少しでも“お仲間”である皆様のお役に立ちたい、と思っています。

今後も、当科が、“お仲間”の一員として皆様に認めていただけるように精進したいと思います。何卒宜しくお願いいたします。

2008. 12.

留学便り

花岡伸佳

米国ワシントン州シアトル市 Fred Hutchison Cancer Research Center  
(Dr.Thomas Spies の下で研究活動のため留学中)

2008 年 4 月より、フレッドハッチンソン癌研究センターの臨床研究部門に留学する機会をいただきました。この便りでは、留學生活と研究の進捗状況について述べさせていただきます。

センターがあるシアトル市は、アメリカ西海岸の北の端に位置し、人口 56 万人と中規模ですが日本によく知られる都市の一つで、全米の住みたい所ランキングで常に上位に評価されています。確かに治安は安定しており、夏は”Ever green state”と言われるほど緑が多く、点在するきれいに整備された公園にはリスも時折顔を出し心が和みました。大都市でも派手な観光地もありますが、落ち着いて住めることが人気の理由だと感じています。街の中で印象的なのは、スターバックスコーヒー



1 号店に代表されるスタバ、タリーズ等のカフェの多さです。1 ブロックに1つ以上はあり、さらに何処に行くにも手には必ずコーヒーがシアトル人のスタイルです。シアトルマリナーズもイチローや城島の在籍により有名ですが、今年の最下位は残念でした。一度会いに行きましたが、イチローの記録達成もまったく盛り上がりませんでした。さらに、今年は雪が滅多に降らないと言われているシアトルで、年末のクリスマス前後に北海道を思わせるような大雪でした。最低気温-10℃、積雪最大の 20cm とシアトル史上初を記録したそうです。私としては、おかげで自宅にいながら雪山並みの雪遊びが出来とてもうれしかったです。ともあれ全体としては評判通りのとてもいい街で気に入っています。渡米直後は、不慣れな状況で様々な手続きが要求され苦労しましたが、何とか生活が軌道に乗った今では、ほぼ日本と同じ環境で過ごせており、研究も本格的に取り組めてきています。



フレッドハッチンソン癌研究センターは、血液臨床医には馴染みの骨髄移植の発祥の地であり、これまで 3 人のノーベル賞受賞者を輩出している伝統ある研究所です。私の所属する Thomas Spies 博士の研究室は、臨床研究部門に属し常勤研究者 1 名、ポスドク 3 名、テクニシャン 1 名の計 6 名の小規模の研究室です。癌免疫に強力なイ



ンパクトを与える免疫物質（MHC Class I related molecule A, MICA）を見出した研究室として有名で、毎年 Nature 級のすばらしい成果を世に送り出しています。研究内容はもちろんですが、研究のアクティビティを支えている秘訣を体得することが、私の留学の目的の一つです。

研究室内では、ポストドクそれぞれが独立したプロジェクトを担当し、Thomas Spies 博士とその奥さんで常勤研究者の Veronika Groh-Spies 博士が助言を与える形で研究が進められています。私は、MICA の受容体である NKG2D を発現している T リンパ球の中で、さらにヒトの



疾患に関連の深い特定のサブセットの起源についてヒトの胸腺細胞を用いて調査を行っています。健常人を対象にした研究なので時間はとても不規則です。深夜に至ることもあります。私達の研究室に限っては、アメリカの研究所らしからぬ徹底した仕事第一主義で、「センター以外で出来ることをセンターでしない」「一週間は5日ではなく7日間」と叱咤激励を受けている毎日です。しかし、この課題は私の留学前より行っている研究の延長であり、非常に興味を持って取り組んでいます。順調に結果も出始めています。この1年間で「何時も細心の注意を払うこと」、「疑問は残さず着実に解決して行くこと」、「生物学には多様性が存在し得ること」を学びました。将来、難治性の血液腫瘍の治療に幾分でも貢献できる研究成果が上げられるように願いながら、もうしばらく勉学に励みたいと存じます。

この留学の機会を与えて下さった中熊教授ならびに医局の先生方に感謝申し上げます。さらに、来年度もよろしく申し上げます。

